



「大航海時代の語学書」成立の背景

丸山 徹

カトリコス巻頭言執筆の依頼を受け、これまでの同誌バックナンバーを改めて読み返す。創刊号巻頭言は、連日「学部改組」に関わる膨大な量の仕事に追われる山本和義現文学部長が図書館長をなさっていた時に書かれたものである。つい五年前のことだが、遠い昔のこのように思われる。

大航海時代、それはキリスト教世界「改組」の時代であった。宗教改革と対抗宗教改革、そんな中でのイエズス会の誕生と海外進出。私が「大航海時代の語学書」と呼ぶのは、その時代のイエズス会によるアフリカ・ブラジル・インド・日本・中国における現地語辞書・文法書・キリスト教要理などのことである。アフリカのコンゴ語・ソンドongo語、ブラジルのトゥピ語・キリリ語、インドのコンカニ語・タミル語、それに日本語、中国語に関するものが現存する。基本的にはラテン語辞書・文法書、それに当時のヨーロッパの要理書を基盤にしながら、それぞれに大変な苦勞をして何とか現地語の語学書を完成させている。それぞれの地域、編纂者、現地語のもつ特徴の違いなどによりその出来不出来に多少の違いはあるものの、概してこれら語学書のレベルは極めて高く、編纂にあたられた方々の苦勞を想うと、ただただ頭が下がるばかりである。

「改組」の時期にあった当時は混乱の時代で、残念なことにカトリック修道会の間でも様々な争いごとがあったらしい。布教の対象とされた褐色の肌をしたアフリカやブラジルの先住民が「あんたら白人は同じ一つの神を信じながら、なぜそんなに争うのかね。」と聞いたという。何と答えたかは知らない。

ただ、その時代に作られた語学書を学ぶ身として、そうした状況をいつも忘れてはならないと思っている。その名を日本の国語学史上に燦然と輝かす通事伴天連ジョアン・ロドリゲスはポルトガル北部ベイラ地方一寒村の出身である。彼は自身の言語に強い劣等感を抱いていたという。事実、彼は残された手紙の中で「私は文章がへたで...」とか「うまく表現できないので...」といった謙遜とも言いつつも訳ともつかないことを述べている。そう言いつつ、しかしながら彼は、他の人の書いた(写した)原稿に朱を入れているし、それに何よりも二つの立派な、レベルの高い日本語文法書を出版したのであった。本当に単なる劣等感だったのか。もっと複雑な何かがあったのではあるまいか。

大航海時代のキリスト教世界「改組」を、またその中に生きた人間をどう解釈するか、それが今の私に与えられた課題であると思っている。

付記：上記キリスト教要理を「語学書」と見ることにについては下記の小論を参照されたい。

「大航海時代の語学書」としてのキリシタン文献(南山国文論集 17 - 1993)

(Toru MARUYAMA : 文学部教授)

カトリック文庫に想う

鈴木 高明

名古屋の大学の刊行物に、長崎の大学の話も如何かと思うけれど、長崎純心大学早坂記念図書館に日本カトリック文庫という特別なコレクションがある。同大学の短期大学時代に、全国規模で、鋭意蒐集・編成されたものであり 1985 年には資料目録を発行している。

1868(明治元)年より 1962(昭和 37)年発行に及ぶ数千冊の資料群は、日本のカトリック出版界の軌跡を辿り、直接に知ることの可能な貴重な集積であって、絶後とは言わないが、空前のコレクションである。

先年南山大学で、カトリック大学連盟の図書館の集会があって、各大学の方々より興味深い話を伺った。純心大学の発表の中で——早坂司教様も江角先生も、日頃「カトリックの本を集めて持つことは、カトリック大学の大切な努め」と話して居られました——というくだりがあった。

早坂司教とは、むろん日本人最初の司教として、1927 年ローマでピオ 11 世により叙階された早坂久之助師であり、師が長崎司教時代に、江角ヤス先生と同志の人たちによる修道会を設立し、指導育成にあたられた。

江角先生は東北帝大出身、日本で 2 人目の女性理学士であるが、修道会創設と教育事業経営という使命に日々を献げられた。新しい修道会と、その事業を築き上げるために、自ら会長として学校長として、封建的な教会体制の中で、永年言語に絶する苦勞に耐えられた。今日各地の純心学園や施設の母体である純心聖母会と、創立者マリア・マダレナ江角ヤス修道女の、昭和のごく初期の話である。

純心大学の発表者は、お若い方であったが、こうして、ひとりひとりの職員に、創立者の理念というか大学の姿勢がきちんと継がれ、それを土台にしての館業務の在り方が目に見えるようで、印象的であった。

日本カトリック文庫は、純心の想いの結実であろう。純心短大(当時)の図書館が「早坂記念」の美しい冠をつけるのは、当然とも言えよう。

年代が少し遅れるが、この南山大学でもカトリック関係の資料の蒐集に着手された。大学はもとより、全学園いや全神言修道会をあげてと言えるほどの大きな動きで、全国のカトリック界の注目を受け、資料も集まり、強い影響を及ぼしてきている。

南山大学の集積は、質量ともに、純心大学の文庫に勝るとも劣らないものであって、それぞれを補完し、大きな相乗効果が期待される。惜しいことに総体としては未整理の状況にある。南山大学カトリック文庫のレポートを読み話を伺うと、関係者は「整理は後日でも、次代でもできるが、失われていく資料はもう入手できない。今はとにかく集めています。集めます。」が優先だとのことだ。

これは極めて適切な考え方で、どんどん姿を消していく資料をまず押さえることが、目下の急務であろう。

明治から昭和初期にかけて、日本の教会は地方を分け、各国の宣教会・修道会に委ねていたもので、その出版活動を大概することも困難であった。全国書誌なども無く、昭和初期に何点が見られたカトリック…総目録とか、カトリック…出版案内なども、十分なものではなかった。

従って、カトリックの資料を識るために、どうしても 1 冊 1 冊と入手したそれを手がかりとする以外に方法はない。南山大学のカトリック文庫は、この時期に貴重な決意と努力を示したものであるとして、特筆すべきであろう。

また、早坂記念図書館はカトリック文庫の目録作成に際して、東京カトリック神学院、聖アントニオ神学院(OFM)、上智大学、英知大学などと組まれ、対象資料を拡げられたことは、今後の同様な企画に対する大きな指標となっている。

繰返すが、明治の再布教から第 2 次大戦に至る迄のカトリック資料には、不明な点が極めて多い。

- ・秋田、山形、新潟、築地、岸和田、尼崎、大浦その他各地の、天主公教会・天主堂など発行の出版物の詳細が見えていない。
 - ・あの時代の内務省納本や検閲制度の結果である発禁や削除の実情、その対策？となる謄本印刷物、あるいは「以印刷代謄写」の出版物。
 - ・日本公教青年会の出版理念と実績。これは後年カトリック出版物統制会議のきっかけとなる。
 - ・大正時代の神言会士の出版活動～それは組織的ではない。昭和初期の耶穌会士の出版活動～それは岡山のカトリック思想・科学研究所で特に顕著であった。
 - ・戦火を免れた光明社(OFM)と、その夥しい典拠出版物。
 - ・原著等が不明の数多い訳書・抄録・翻案などに関する事情。
 - ・教会以外の出版社から発行されているカトリックの資料の確認、など
- ちょっと振返っても、直接資料に当たらなければ解決しないことが多い。

大正・昭和初期については、まだ手が届く部分もあるが、幕末・明治期はもう遠いことになり果ててしまった。

本文用紙と変わらぬような薄い表紙に、柳茂安などの名があったりする、言う迄もなくルモアヌ神父であるが、同師は十八通りの名を用いられた。書き手不足と、一人雑誌の感じを避けるためであったろうが、当時関係した司祭信徒の筆名すら、すでに不明のことが多い。

このように見ると純心・南山のカトリック文庫とその動き、働きは、単に設置大学のみでなく、日本の教会にとって意義深いものと言えよう。

「我が国のキリスト教文化を実証する資料の保存と利用」の南山大学の構想と、「カトリックの本を集めて…」の純心の早坂司教の言は、共通の大原則であって、全カトリック大学が銘記すべきことであろう。

時に流されると目先より見えなくなり、学科構成とか利用効率とか、短絡的な視線で図書館を眺めたりもする。しかしカトリック大学の創立の理念を想うとき、純心大学、南山大学のカトリック文庫は、決して両大学のみのことではない。

各大学の図書館事情もあるが、共通の使命を考え、大局的な判断で一緒に歩むべきであろう。それぞれ大学によって可能な方法がある。カトリック文庫を日本カトリック界の資産と見て、心を寄せ手を携えてその充実を図るべきで、それこそカトリコスではないか。

今、かけがえのない資料価値を持つ 1 冊 1 冊が失われて行く。「集めています。集めます」との関係者の言葉を、強く受け止め、また自戒としたいと望んでいる者のひとりであるのだが…。

(Takaaki SUZUKI: 藤女子大学図書館)

聖フランシスコ＝ザビエル渡来450 周年記念国際シンポジウム'98 に参加して

伊藤 敦子

12月3日(木)と5日(土)・6日(日)、寒冷の中、上智大学で開催された「聖フランシスコ＝ザビエル渡来 450 周年記念国際シンポジウム'98」に参加した。「大航海時代におけるヨーロッパとアジア世界との出会い」と銘打ったこのシンポジウムでは、世界各国のスペシャリストによる専門知識の披瀝と熱い議論とによって、ヨーロッパの霊性・知性を代表する聖フランシスコ＝ザビエルが、日本を始めとするアジア世界にどのような影響を及ぼしたかが次々と解き明かされていった。以前から聖フランシスコ＝ザビエルの生涯については関心があった筆者には、誠に至福とも言える 3 日間であった。ここでは特に印象深かった講演の要旨を以って報告としたい。

○ザビエルと日本 - 人間と文化の出会い -

講演者 結城了悟師(イエズス会司祭・日本二十六聖人記念館館長)

ザビエルはマラッカで初めて日本人ヤジロウに会った後、日本は布教に適しているとの判断を下し自ら赴くこととした。暴風雨・暗礁・海賊など数々の危険が指摘されたがその決意は揺らぐことはなかった。

鹿児島上陸後暫くは、未知の言葉の壁にぶつかり、かつてないほどの淋しさを感じはしたが、進んで日本語を学び、基礎的な教えを簡単に翻訳する準備も進めた。ザビエルは進みながら言語的な間違いを正し、適切な用語がないと新しい表現を加え、もっと完全な表現を探していったのである。路上での説教、説明と並行して幾多の個人的な出会いがあったが、それは全階級に及んでいた。それぞれの出会いが道を開き、新しい経験、あるいはもう一人の求道者をも得ることになった。ザビエルとともに生きる人々は彼の精神と徳を受けたが、その徳には神に対する限りない信頼が際立っていた。この徳は三つの主な力、即ち、神に対する愛、神が段階的にお与えになる試練、そして要求によって育まれていた。ザビエルは危険の最中でも平素でも希望と信頼の全てを神に託し、そこから霊的な恵みを受けていたのである。この信頼は最期場、上川(サンシャン)島でも変わることはなかった。生きる望みを奪われた後も、ザビエルは命も使命も信頼をもって神の手に委ねたのである。ザビエルのその時の心情を理解しない限り、彼の日本での行動を理解することは無理であろう。

その後ザビエルは二つの夢を果たすため京都に向かうこととなる。その一つは上洛して天皇と謁見し宣教の許可を願うこと、もう一つは比叡山や高野山などの大学を訪れ真理について論争すること、ひいてはそこにコレジヨを開くことであった。しかし謁見は叶わず、大学も仏教の諸宗派の本山にすぎず、ザビエルの夢は無残に打ち砕かれてしまった。この二つの文化的衝撃と荒廃したミヤコを目の前にしてザビエルは自らの計画を立て直し、当時の最有力大名の一人、大内義隆の首府山口から布教を開始することとした。山口では回心する人の数が特に武士層に増え、彼らは新たな教え手としてザビエルの協力者となっていった。山口での布教は順調に進んだが、ザビエルはここで日本文化・思想に対する中国の影響を知り、中国での宣教を改めて志すに至った。

ザビエルは唯一の神と救い主であるキリストを日本に、日本をヨーロッパに紹介した。彼は道を開く先覚者としての使命を果たしたが、それも自ら先頭に立って重責を担い、理想を伝えながら命を賭けてのことであった。そのザビエルに日本は最も良いもの、即ち自国民の心を差し出したのである。

○日本人とキリスト教との出会い

講演者 岸野久氏(桐朋学園大学短期大学部教授)

ポルトガル人は初来日以来九州各地へ来航するようになった。彼らは商人であるが、その日常的な信心行動ははからずも日本人にキリスト教を知らせることになった。その一方でその信心行為に関心をもった日本人の自発的な知的好奇心や関心を、彼らは高く評価し、ザビエルに日本人が理性的の国民であることを知らせ、日本布教を進言した。マラッカでポルトガル商人に日本人のアンジロー(ヤジロウとも言う)を紹介されたザビエルは、彼にポルトガル人の証言通りの日本人を見出し、日本布教を決意したのである。

ザビエルの来日とポルトガル人の来日を日本社会への影響という観点から比較してみると、前者は貿易取引に専念したので、その影響力は局部的であるのに対し、ザビエルは、その人格と教養、宣教師という職業と行動範囲の広さによって、その影響力は日本社会全体に及んだ。それゆえザビエルの来日によって、日本はヨーロッパと真に出会うことになったと言っても過言ではない。

ではザビエルの布教活動を通して、日本人がキリスト教をどのように受けとめたであろうか。ザビエルは説教においてまず神とその救いについて話し、一夫多妻、男色などの性の乱れを批判している。

まず神とその救いについてであるが、ザビエルは来日後日本人には唯一絶対なる神と神による創造の観念が存在しないことに気付いた。というのは仏教は縁起の世界であり、すべてのものは相互依存関係にあると考えるので、万物の創造とか、創造主の観念はまったく問題となり得ないからである。ザビエルはこのような精神風土の日本人にキリスト教を伝えるには、すべてのものの第一原因としての神とその働きを把握させることが先決と考え、その一つの方法として太陽や地球や月などの運行に関する天文学上の知識を援用している。ザビエルは、神による天地創造と救いを説明する際、人間の創造と人間観にも触れたであろう。即ち、人間は肉体と靈魂とから成り、靈魂は不滅であり、死後の審判を受ける存在であること、それゆえ、靈魂をもつ人間は世界の一切に勝り、神の前に一個の人格として平等なる存在であること、である。

次にザビエルは一夫多妻や男色などの性の乱れを激しく攻撃し、これらを禁止している。これらの行為は神の掟への侵犯であり、宗教上の大きな問題であったため、ザビエルは慣習の違いとして黙視できなかったのである。

このようにして、日本人はザビエルから唯一絶対なる神の存在と新しい人間観、十戒に基づく生活倫理と来世における靈魂の救いについて知ることになった。信者となったのは、仏教に救いを見出せなかった、都市の一部の知識人と、農民や漁民、都市部の貧民たちであった。ロドリゲス・ツージによれば、彼らは「善業を行ったことに対する褒賞として、死後において未来永劫にわたる至福と明らかな見神を約束していて、人々を永遠の苦しみから解放し、現世において苦勞すればするほど来世において報いられるということを知った」ために入信した。現世において人格を無視されていた民衆にとって、キリスト教は来世での救済を約束してくれる解放の思想となったのである。

日本人はザビエルの伝えたキリスト教によって、今までにない新しい価値観と生き方を知り、また視野を世界大に拡大することができた。キリスト教のもつ、この異質性と世界性こそ日本社会に衝撃を与えつつ、国際性に満ちた南蛮文化を生んだが、封建支配者にとっては脅威となった。ザビエル退去後の日本の歴史は、キリスト教とヨーロッパ文明とのかかわりで推移したと言ってもよいであろう。それ程ザビエル来日の持つ歴史的意味は重いのである。

○京都大学蔵「聖母十五玄義図」のザビエル像について

講演者 若桑みどり氏(千葉大学教授)

ザビエルの最初の肖像は「最初のイエズス会メンバー」と題するスケッチであるが、そこではイグナティウスは眼光鋭く、凜然として権威に満ち、一方ザビエルは法悦にあふれた視線を天に向けて描かれており、すでに二人の始祖の理想化と典型化が始まっていることを示している。この後二人の聖人の肖像が単なる肖像を超えて、厳格な規律と熱烈な布教というイエズス会の精神の象徴的な聖人図像となってゆくという経過があり、二人の聖人の容貌、身振り、視線は、個人的な特徴のしるしとしてというよりも、このような象徴の形式となって伝播することとなる。

シュルハンマー師による『ザビエル伝』の挿図の重要な場面にはすべて「十字架」が描かれ、ザビエルの唯一のアトリビュート(象徴的付属物)、即ち異教世界に布教するイエズス会の信仰と勇気の象徴、そしてザビエルがもつただ一つの「武器」となっている。同書の口絵では、ザビエルは法悦の中で十字架を胸に死を迎えつつ、彼を天国へと導く天使をすでに見ている。これは対抗宗教改革期の殉教図像の定型であって、そこでは、殉教者の肉体は地上で最悪の苦痛を味わっているが、その靈魂がすでに天国に迎えられているのを目の当たりにしているという状況が強調された。そのため、殉教者の表情には、最高の苦痛のなかでの歓喜と恍惚が示されるのである。

神戸市立博物館蔵の「ザビエル像」が、十字架を胸に抱きまばゆい天上の光のなかに浮かぶケルビムを恍惚と見ているのは、明らかにこのような劇的場面の反映である。この法悦的視線と光と十字架の結びつきは、対抗宗教改革期に頻繁に描かれた聖フランシスコ像に特有の図像であったが、16世紀のある時点で、聖フランシスコと聖ザビエルの図像は融合していったようである。

一方、京都大学「聖母十五玄義図」の中のザビエル像は、神戸のものとは違い「両手で衣服をつかむ」図像である。このザビエル像の原型として考えられるのは「衣服をつかむ」のではなく、実は「衣服の胸を開く」身振りであると発表者は推定している。モラッツォーネの「法悦の聖フランシスコ」のなかでは、聖人は聖痕を受けた苦痛と歓喜の法悦のなかで光に照らされ、胸を開いて聖なる傷痕に触れている。聖フランシスコは法悦と、聖痕に通じるイエスと同じ受難の象徴として、その胸のFidesを開くという動作において、イエズス会の新聖人像の形成の際に参照されたものと考えられる。この「胸を開く」ために衣服を引っ張る動作が、単に「衣服をつかむ」動作に変化し、これが一部で伝承されることになったと思われる。上述の「聖母十五玄義図」のザビエルもその系譜であるが、ここでザビエル像は激しい熱烈な人格としてではなく、冷静な人物として表象されたのである。

この「聖母十五玄義図」では上に聖母子を置き下にイエズス会二聖人を配している。このような構図は早くは15世紀に始まったが、これ以降16世紀を通じて、特に信者を聖母信仰へと導く聖人の使命が重要になるに従って、聖母子の前面に聖人らが仲介者として描かれる祭壇画が一般的となり、ついには対抗宗教改革のもっとも典型的な図像を形成した。即ち、宗教画がただ超越的な神の世界を表現するだけでは最早その機能を果たせなくなった対抗宗教改革期において、天上の図像は地上の信者との関係を一層深め、その神聖さを守ると同時に、聖人という天と地の仲介者を用いて、聖母を一層身近に、親しく、また望ましいものとして信者に紹介する、このような構成が生み出されたのである。聖人の視線や身振りに導かれて、一般信者は聖母に祈り、これを崇拜し、これと親しい関わりをもつことができるようになったのである。

それぞれの信心会はそれぞれの創立者や守護聖人を前面において、その仲介を通しての救いを実現したが、イエズス会では、イグナティウスとザビエルがその役割を果たした。イグナティウスが静謐な祈りを表象し、ザビエルは燃えるような信仰の魂と苦難の中での法悦を教えたのである。

(Atsuko IT0:図書館事務課)

日本カトリック連盟図書館協議会実務研究会に参加して

近藤 眞由

12月4日に英知大学で行われた日本カトリック連盟図書館協議会実務研究会に参加した。今回の研究会ではイエス・キリスト関係図書の収集についての講演と、図書館システムの業務面とサービス面からの報告と討議がなされた。以下に講演内容を述べ、報告とする。

「カトリック大学図書館における、イエス・キリスト関係図書収集と充実について」

講演者 和田幹男 英知大学神学科教授

ここ数年のうちに、欧米だけではなく日本でもイエス・キリストに関する夥しい数の書物が出版されている。宗教ばなれした現代とはいえイエスへの関心はとどまるところを知らない。そんな現状の中でイエスを知ろうとするには、どこから手がけていけばよいのか専門家でも戸惑うことがある。カトリック教会では、イエス研究関連図書の出版物の現状を前に、教皇庁聖書委員会発表の「聖書とキリスト論」でこの問いに答えているのでこれを要約して紹介したい。

この文書は高圧的にイエス研究を統御するものではなく、19～20世紀のイエス研究を総覧し今後の研究を促すものとして作成された。ここではイエス研究をキリスト論と呼んでいるが、キリスト論とは神の独り子として礼拝の対象となったイエスは何者かを問うことである。昨今、イエス・キリスト研究のために様々な道が試みられているが、そのイエスを伝える資料に新約聖書、特に四福音書がある。この新約聖書をいかなる文書として受け取り、読まなければならないかとも関連して、キリスト論は変遷してきた。本文書はイエス・キリストをたどる道を11に分類し、最近の著作を展望することにより、それぞれに潜む危険性を指摘し、それを前にどうすればよいかを問うものである。

1. 伝統的ないし古典的神学による道: ニケーヤ、コンスタンティノーブル、エフェソス公会議に基づく伝統的なカトリック神学の教義学によるもの。
2. 批判的タイプの思弁による道: 伝統的神学の中から、伝統的神学の限界と見直しの必要性を主張する。
3. キリスト論と歴史学的研究による道: 福音書を資料としてイエス伝を記述する。
 A. シュヴァイツァー著「イエス伝研究史」「A. シュヴァイツァー著作集」第17、18、19巻
 H. ツァルント著「20世紀のプロテスタント神学」ルナン著「イエス伝」
 フォン・ハルナック著「基督教の本質」
4. キリスト論と宗教学による道: 古代オリエントの宗教的背景の中で見ようとするもの。
 プセツト著「キュリオス・クリストス」
5. ユダヤ教学からイエスへの道: 特にユダヤ教との関連で見ようとするもの。
 ブーバー著「マルティン・ブーバー著作集」「キリスト教との対話」
6. キリスト論と救いの歴史: 主としてプロテスタントの組織神学者。
 O. クルマン著「キリストと時」
7. キリスト論と人間学: 主としてカトリックの神学者。
 ティヤール・ド・シャルダン著「現象としての人間」カール・ラーナー著「キリスト教とは何か」
8. イエス・キリストの實在的解釈: R. ブルトマンについて。
 熊沢義宣「ブルトマン」
9. キリスト論と社会的関心
10. 新しいスタイルの組織的研究

11. 上からのキリスト論と下からのキリスト論

これら、11に分類したイエス・キリストへの道にはそれぞれ長所があるが、それ一つだけを用いるなら、聖書のメッセージ全体を明らかにしないばかりか、イエス・キリストについて欠陥イメージを広める危険性をもっている。だからこそ、それぞれの危険性を指摘し、聖書の証言の総体に耳を傾け、イエス・キリストを十全的に知ることを目指さなくてはならないのである。

講演内容は実に興味深く示唆に富んでいた。先生が強調されたいことは以下に要約できるだろう。

遺伝子を操り未知なる生命すら作り上げ、すべての創造主に成り代わろうとしている人間は、知識・技術と数多くのものを手にいれてきた。とどまるところを知らない文明は自然の摂理を歪め、やがて独り歩きをはじめてしまうだろう。この激しく変化する時代の中で宗教もまた姿を変えている。かつてはヨーロッパ中心の思想のもとに栄華を極めていたキリスト教も、色を変え、形を変え、今やアジア、アフリカ、インド、アメリカなど世界全土に広まっている。それぞれの文化的違いは明らかであり、捉え方の違いも大きいであろう。さまざまな思想が渦巻くなかで、21世紀の日本、いや世界はいったい何処に導かれるのだろうか。生態系を破壊し、神の怒りをうけ破滅へと歩むのか、与えられていた愛の大きさに気づき、犯してきた罪を悔い改め、幸福へと辿り着くことが出来るのだろうか？ どちらにせよ鍵を握るのは人間の「心」であり、その「心」にキリスト教を含め宗教と名のつくものは影響を及ぼすはずである。だからこそ、多種多様なキリスト教研究のなかで、そもそもイエス・キリストとはいったい何者であったのかという本質を問い直すことこそ、キリスト教研究の根幹であるはずである。

(Mayu KONDO:図書館事務課)

資料寄贈一覧(1998.12.31現在)

「カトリック文庫」充実のため、下記の方々より貴重な資料を寄贈して頂きました。
ここに御名前を掲載させて頂き、改めて謝意を表したいと存じます。

[団体]

聖母カテキスタ会本部(愛知県名古屋市)

フランチスコ会(東京都)

問合せ先：南山大学図書館「カトリック文庫」プロジェクト
〒466-8673 名古屋市昭和区山里町1-8
TEL:052-832-3163 FAX:052-833-6986
担当者：山辺 (E-Mail:yamabe@ic.nanzan-u.ac.jp)

南山大学図書館カトリック文庫通信

カトリコス第11号 1999.1.1発行 南山大学図書館「カトリック文庫」プロジェクト
編集委員：三浦基、尾形裕司、近藤真由